

「あんた、どこさ？」

飯野文彦

あんた、そう、そこを歩いている、あんた。

見かけん顔だねえ。どこから来た？

東京。東京のどこ？ 百人町って？ ああ、そんな町が、新宿の近くにあるの。それ

はそれは、遠くからきたもんだね。

で、何の用があつて、こんな山奥まで来たの？ ハイキング？ この山奥に？

はははは、こりやあ、物好きな人もあつたもんだ。

温泉が湧くとか、釣りができるとか、景色がいいとかだつたらわかるけど、何にもないんだよ、ここには。

悪いことは言わんから、すぐに帰つたほうがいい。熊にでも襲われたら、えらいめにあう。近くに病院もねえし、携帯も通じないから、助けを呼ぶこともできない。

ははは、アンテナゼロ、やっぱり無理だろ。言わんこっちゃない。それにしても、何
1
で、こんなところへわざわざ来たの？ ハイキングなんて、うそうそ。道に迷つたんだ

わかるさ。見たところ、地図も持ってないようだし。リュックとか水筒とか、何も持っていないもの。

それに、訳ありだね。わかるさ。道に迷ったからとって、すんなり来られるような場所じゃない。

死ぬ気？

そこまで考えてるわけではないけれど……って、成り行き。どういうこと？ つまり成り行きで死んでもいいってこと。

何があつたか知らないけど、もつたいないねえ。まだ若いのに。いくつ？ 三十。若い若い。結婚は？ してない。

ああ、わかつたよ。失恋したんでしょ？

やっぱり。それで自棄になつて。

原因は？ 相手につきあつてゐる男がいた。若いんだから、それくらいいても……へえー、同じ会社に勤めていた三つ年下の女で、あんたの直属の上司と不倫していた。

よくわかつたじゃない。そういうことをする女は、うまく隠しとおすもんでしように。彼女から言われた。黙って結婚するのは、心苦しいから？

ちがう。ホテルであんたが、はやく終わったら、部長さんのほうが素敵って、惚気た。おやまあ、それはそれは。惚気たわけじゃないんだらうけど、あんた、よっぽど下手なんじゃない？

ごめんごめん。仕事や結婚式の準備で疲れていたってこと。それにしてもバカな女だね。いくら物足りないからって、言っただけいいことと悪いことの区別くらいつくもんだ。子どもじゃあるまいし。

できちゃった婚？　なんで、それは？

ああ、子どもができたんで結婚しようと決めた。ところが、お腹の父親はあんたじゃなくて、上司の子だったと。

それは、自棄にもなるね。でも、ものは考えようだよ。結婚前にわかって、よかつたと思えば。そういう女は、結婚した後も、必ずまたやるから。そういうもんだって。

だからといって、あんたが死ぬのは、どうかねえ。もったいないよ。悪いこともしないのに。むしろ、相手の女が、死んだほうがいいんじゃない。

3
カツとなつて、刃傷沙汰とか、思わなかった？　思った！　でしょ。なら何で……？　あんた、いい人だねえ。殺したかったけど、お腹の子どもには罪がないからって。罪があるんじゃないのかい。いちばんの罪の結晶なんじゃないのかね。まあ、いいけど、

で、これからどうするの？ 死ぬ決心がついた？

黙っているとところを見ると、まだまだ生に執着があるみたいだね。もっともだ。せつかくこの世に生まれてきて、これからってときに、すんなりと、ハイ死にます、とは言えるわけがない。

でもね。なら、どうする？

質問の意味がわからないかい。そうか、まあ、無理もないか……。

つまりね。死ぬ決心もつかないまま、あんたはここに来ちまった。どういう加減か、あんたにはわからないだろうけど、ここまで来ちまったことはねえ。実はすでにあなたの運命は決まってるんだよ。

それなら、どうするなんて質問は無意味じゃないかだって。その通り。あんた、意外と頭がいい。ほんとうにもつたいないねえ。でも、仕方がない。

あんたが言うとおり、ここに来て、私に会った時点で、あなたの運命は決まっちゃった。

どんな運命か、だって？

それを私に訊くのかい？ やめておくれよ。私にだって、思いやりくらいあるんだか

ら。人に訊くよりも、自分の胸に手を当てて、よおく考えてごらん。

わかったかい？ わからない。いや、わかっているはずさ。ああ、わかったわかった。騒がないでくれよ。今になって、私に当たつてもしようがないだろう。

そうだよ。あんたはこれまでがんばってきた。人間になって、自分を人間だと思い込んで、がんばってきた。

そりゃあ、そうだ。あんたの親父さん、お袋さんも人間社会に溶け込んでいただろうし、まして二世のあんたは、生まれたときから自分のことを人間だと思っていただろう。黙って、落ちついて、私の話を聞くんだ。そう叫ばないでも聞こえる。おれは人間だ、人間でないなら、何だと言うんだ、って、そんなに大声を出さないほうがいいよ。

ここら辺りには、私以外にもいるからね。あんたの声を聞きつけてやって来られたら、こっちの商売あがったりだ。

まだわからない。そうか、まあ、仕方がないなあ。それじゃあ教えてやろう。冥土の土産ってやつさ。

何を不吉な、おれはもう死なない、死ぬのはやめただつて。ははは、遅いよ。もう遅い。

ここはね、人間には来られない場所なんだ。

びっくりしたな。とつぜん大声で笑い出したりして。何がそんなにおかしいんだ？

人間のおれが来ているじゃないか。あんただって、そうだろう……それがおかしいのか。そうか、おかしいなら笑うがいい。ただ笑いながらでいいから、それがこのころの底から出ている言葉かどうか、よく考えるんだ。

ほら、目が泳ぎました。こころ当たりがあるんだね。そうだろ。すなおに認めな。

どうした、今度はしおらしく頭をさげたりして。私が、誰か、だって。そうかい、それなら私のほうから話すとするか。

ああ、そうだ。私は人間じゃない。猟師のかっこうをしているが、化けているだけさ。ふだんは化けたりなんかしないので、いつも通りのかっこうをしている。

けれども、ひさしぶりに獲物が来たから、あわてて化けたんだ。そうだよ、獲物って言うのは、あんたのことだ。

この鉄砲は、あんたを撃つためにわざわざ持ってきたんだ。人殺し？ 飛んでもない。人間を殺したいと思ったことは、たしかにあるけれど、そんなことをしたら、やつら総出で押しかけてきて、根こそぎやられちまう。くわばらくわばら。

矛盾している？ 人間はここに来られないってさつき言ったじゃないか、だって。たしかに人間は、来られない。が、多勢に無勢で無理やり押しつぶされちまう。

ほら、蟻の巢に人間は入ることはできないだろうが、ブルドーザーみたいなもんを使えば、入らなくても、ぶちこわせるだろう。あれと同じ理屈さ。

どうだい、だんだんわかかってきただろう。その顔を見ると、凶星だね。

たしかにあんたは、ずっと人里で、自分を人間と思い込んで生きてきただろう。中にはそのまま人間と疑わず、一生をまっとうするものもいる。

でも、何かにつまづいたりして、今回のあんたみたいになると、ぶらり彷徨い、ふと気がつくところに来ている。

わかったようだね。そうだよ、おかえり。ここはあんたの故郷だ。正式には、あんたの親父やお袋の生まれ故郷だ。

私たち一族も、いろいろあつてね。このまま山で暮らすべきか、それとも町に出るべきか。二つに意見が分かれた。

解決がつかないまま、私は山へ残った。そしてあんたの親父たちは町へ出た。町へ出るなら、正体は明かせない。人間になりきって、暮らすしか道はない。

それにはそれだけの化ける技量が必要だ。よし、それならと私たちの力を与えてやることにした。その代わり、私らも見返りを求めた。

死ぬときには、こちらにもどってきて、その身体を私たちに差し出すこと。肉は貴重

8 な栄養源だが、せちがらい世の中、なかなか手に入らないからね。

おや、また大笑いをはじめたね。今度は何がおかしいんだい？ 話があまりに馬鹿馬鹿しくて、これが笑わずにいられるか、と言うんだね。

それなら、なぜここへ来られたんだ。どうやって、ここまで来たか、思い出してみればいい。

それみる、思い出せないだろう。ただ嫌気が差して、遠くに行きたいと思った。それであんたの中にある、スイッチが入ったのさ。それで私たちが巧妙にこしらえた、次の壁をするりと抜けて、気がついたら、ここを歩いていたってわけさ。

次元の壁って、何だ、だつて？

いやあ、そう訊かれると恥ずかしい。ずっと人間として生活してきたあんたに、バカにされないように。そう思つて、少しばかり気取つて言つただけのことさ。

つまり、これだよ。頭に木の葉をのせて、ちちんぷいぷいのぷい……とね。そう、つまりは化かしてあるのさ。だからおおぜいの人間に押しかけられたり、ブルドーザーなんかを使われたら、いちころつてわけ。

まったく人間ってやつは、桁外れの乱暴者だからね。悔しくても、そつと息の根をひそめて、あいまいに化かすしかないのさ。

おっと、笑ったね。その笑いは、バカにした笑いだね。あんただって、同じようにして化けてるだけなんだよ。

おっとっと、大笑いだね。腹を抱えて笑うってやつだね。ははは、いいよ、笑えば。いつそのこと、ほんとうに腹を抱えて笑ってごらんよ。

もっと、もっと強く、腹にさわって。もっと強く腹に、もっと強く！

はははは。驚いたかい？ 私たちの特技の〈腹鼓〉さ。ああ、もう気取って私たちがなると言うのは、やめだ。おいらたちの十八番だ、ポンポンポン、それ、ポポン、が、ポ

ン。
あんたもいっしょにやっごらんよ。平手よりも、かるく拳をにぎったほうが、いい音がするから。こんな風に、ほら、ポンポンポン、ポポン、が、ポン。それ――。

ああ、びっくりした。いきなり、やめるおとおおなんて、ばかでかい声で叫ぶから。鼓膜が破れたかと思つたよ。

どうしたの？ 怒つた？ 泣いてるの？ 泣いているね。悲しいのかい？ 何が悲しいんだい？

おれは狸なんかじゃない、おれは人間だ、バカにするな……か。うんうん、前に仕留めたやつも、同じことを言っていたつけ。

つらいんだろうな、きつと。そりゃあおいらみたいに、生まれたときから狸だつてわかつていれば、別だろうけど、あんたはずつと人間だつて信じてたんだから……。

素直に結婚しておけば、よかつたんじゃないのかな。結局、おいらたちだつて人を化かしてゐるわけだし。

人間の化かし合いだつて、黙つて見過ごしてやつてれば、あんたもまだまだ、ここに帰つてくることはなかつた。一生、自分は人間だつて信じたまま、死ねたかもしれない。もつとも死んだ後、死骸となつてここにもどつてくるんだけどね。

そうだよ。あんた、これからおいらに食われるのさ。この鉄砲は、本物だ。ずいぶんと古いけど、おいらの爺さんが、本物の猟師と取り引きして、もらったんだ。おいらの家の家宝つてわけさ。

撃てるよ。撃ち方も教わつた。殺せるよ。現にさつき言つた、あんたの前に来たヤツなんか、土手つ腹に一発ズドンとやつてやつた。

でも、腹はよくないな。うん、よくない。どうしてかつて？ 苦しむんだよ。どぼどぼ血を流して、痛い痛いって苦しがつて、しまいには、自分で腸を引っかきだして……。

あんたは、頭を撃つよ。だいじょうぶ、外すもんか。そうすれば、あんな痛い思いはしなくても、すむからね。

でも、おとなしくじっとしていてくれよ。逃げたり、動いたりしたら、別のところに当たって、苦しむだけだから。

さてと、それじゃあ、はじめるのでしょうか。さっきあんたが何度も大声を出したから、悪いんだ。立ちの悪い連中が、嗅ぎつけてやってくる前に、終わらせなくちゃならない。

ああ、泣きなよ。ああ、やめてくれよ。助けてくれって言われても、それだけはできない。もう決まってることなんだ。人殺し？ だからそうじゃないって、腹を叩いてわかっただろうに。

やめてくれ。大声を出すのは。だめだよ、ここからは逃げられない。かえって苦しむだけだ。おとなしくジツとしていれば、一発で頭を撃ち抜いてやるから。

困ったな。おいらが見逃しても、あんたは絶対に助からないんだって。実はね。あんたを仕留める最初の権利は、おいらが持つてる。

もしおいらが失敗しても、失敗しないけど、必ず仕留めるけど、たとえばの話、失敗したとしても、次に権利を持つているヤツが現れて、あんたを狙う。

そいつが失敗しても、三番目。そいつが失敗しても、四番目。そいつが失敗しても……え、何番目までいるかって？ ええ、たしか七、八、九、十、十一……ああ、とにかく

自慢じゃないけど、おいらが一番やさしいよ。あんた、おいらでツイてるよ。ほかの連中なんか、問答無用でズドンだったり、わざと太腿とか撃って、動けなくしてから、石で叩いたり、包丁で削ったりするヤツもいるんだから。

まあ、気持ちちはわかる。それだけ、人間になったあんたらに恨みつらみがあるんだ。狸の本分を忘れて、好き勝手やりやがって。狸としての本分を守っているのは、山に残ったおいらたちだからね。

だから、その代償として、あんたたちはここに来たら逃げられない。おとなしく撃たれなくちゃならないんだ。

さあ、日が傾いてきた。そろそろタイムアップ。へへへ、すごいだろ。実はおいら、こつそり村の中学校へ忍び込んで、勉強してるんだから。

苦しみたくなかったら、動くなよ。一発でしとめてやるからな。

えっ、何だって？ 撃ち殺して、その後、どうするつもりかだって？

ははは、それは人間だったあんたのほうがよく知ってるんじゃないのかい。何のためにおいらが、こんなかつこうをしてると思うんだい。

そう、猟師だ。猟師のかつこうをして、あんたと出会ったとき、おいら、訊いただろう。そうか、それじゃあ、言い直してやる。

あんた、どこさ？

東京、どこさ？

百人町、どこさ？

ここは、せんばさ。

せんば山には狸がおつてさ。それを猟師が鉄砲で撃つてさ。

ズドーン。ほら、一発で脳天をぶち抜いただろ。痛くなかつただろ。さつそく火を起こして、お湯を沸かして。

煮てさ。焼いてさ。食つてさ。

「ああ、うめえ。やつぱり肉は狸にかぎる」

ががつと骨まで噛み砕かんばかりに、喰らつた後、

「ごめん。嘘ついちまった。おいらは狸じゃねえんだ。あまりに狸がうまいから、ここにいた連中、全部、喰ちまった。でも、ま、いいだろ。あんたら喰われるのは、避けられない運命つてやつなのさ」

残骸を、木の葉で隠していく。

13 「それを木の葉で、ちよいとかぶせ」

14
〈それ〉は、
いずことも知れず消えていった。